

「じゃあ、俺が凜の体エッチに開発してあげる」

3年付き合っていた彼氏のお家に行くと、玄関に私のではない女性の靴が置いてあって、一気に心拍数が上がった。恐る恐る寢室のドアへ近づいていくと、女性の甘い声と、彼氏の会話が聞こえてくる。

「んあっ……ねえ、いいの？」

「あ？あいつ？まだ来ないよ。それに、お前の体、気持ち良すぎて止められないし……」

「ああっ……彼女、不感症なんでしょっ……？可哀想……んあ」

「あいつ、ほんと淡泊でつまんだよね」

そっとな家を出て、別れの連絡をした。

飲まずにいらなかった私が選んだバーに、高校時代の先輩、圭先輩が働いていて、思わず、愚痴ってしまった。すると、エッチな体を開発してくれると予想外の提案をされる。

1 絶望の中に予想外の出会い

「返事来てないから合鍵で入ろうかな」

付き合って3年になる彼氏、幸太郎の家へ最初に連絡した時間より早めについた私。

仕事が早めに片付いたから予定より1時間ほど早く家に行くと連絡したのだが、返事が返ってこないので合鍵で入ることにした。

「ただ……………」

ただいまと言いかけた瞬間、玄関に、私のものではない女性の靴が置いてあって、一気に心拍数が上がった。

恐る恐る寢室のドアへ近づいていくと、女性の甘い声と、彼氏の会話が聞こえてくる。

「んあつ……ねえ、いいの？」

「あ？あいつ？まだ来ないよ。それに、お前の体、気持ち良すぎて止められないし……」

「ああつ……彼女、不感症なんでしょつ……？可哀想……………んあ」

「あいつ、ほんと淡泊でつまないんだよね」

そつと家を出て、別れのラインをして、通知オフの設定にした。

浮気現場を目撃してしまったこと、彼の家に置いていた荷物は、郵送で送ってほしいこと、できるだけ感情を入れない文章にして送った。

もう、涙で画面が見えなくて、ただただ、苦しくて、苦しくてたまらなかった。

とにかく、彼の家から離れたくて、急足で自分の家の最寄駅まで戻ってきたのだが、この苦しい感情のまま家へ帰る気になれなくて、駅前をぶらぶらする。

「ぐすっ……くるしっ……」

一体いつから浮気されてたんだろう……。それに、淡白でつまらないって絶対エッチのことだね……。しょうがないじゃん……。あんまり気持ちよく感じないからエッチ好きじゃないんだもん……。それでも、口で頑張ったりしてたのにな……。……。

誰にも向けられない愚痴が頭の中で何個も何個も湧き出てくる。

「このままお家帰りたくないな……」

適当に歩いていたら、駅から少し離れた飲食店の通りに出ていて、気になっていたバーの存在を思い出す。

「あそこ、やつてるかな……。気になってたし、行ってみようかな」

家へ帰る途中にあるおしゃれな看板のバーが気になっていた。地下にあることもあって、1人で入る勇気が出ないでいたのだが、今日のような日は、地下の静かな場所で飲みたい気分には駆られて、気づいたら、足を踏み入れていた。

「いらつしやいませ。……………1名様ですか？カウンター席へどうぞ」

中へ入っていくと、カウンターの中间にいる黒シャツのバーテンダーに声をかけられる。シャツがピツタリとくつつき、筋肉質な体をしていることが一目でわかる。

想像していたより暖かい雰囲気包まれていて、料理のいい匂いがする。

席に着くと、さつき声をかけてくれた店員さんがメニューを持ってきてくれる。

「……………凜？だよな」

急に自分の名前を呼ばれ、びっくりして、彼の顔を見る。

見たことあるような、ないような…………

「覚えてないか？高校一緒だった圭」

「……………圭先輩……………！」

「思い出してくれたみたいだな」

くしゃっと笑う顔が高校時代の彼を思い出させる。

「びっくりしました……………こんなところで会えるなんて……………」

「……………泣いてたみたいだけど、何かあったのか？」

圭先輩の声があまりにも優しく、止まっていたはずの涙がまた溢れ出してくる。

「ふっ……………うう……………すみませっ……………」

「ほら、ティッシュ。接客しながらになっちゃうけど、話聞いてやるよ」

「えっ……そんなっ……いいですよ……申し訳ないですし……お仕事邪魔になっちゃうし……」

「いーから。そんな目真っ赤にしてるのにほっとけないだろ？」

昔から優しい所、変わってない。

圭先輩おすすめのカクテルと、おつまみを頼んで、ぼーっとする。スマホを触ったら、幸太郎からの連絡を氣にしてみようでやめた。

店内は、まばらにお客さんがいて、ゆったりとした時間を楽しんでいるようだった。客層がいいのか、話し声も氣にならない程度で、心地いい場所だなと思った。

「ピーチフィズと、チーズとナッツの盛り合わせ。苦手なものはないか？」

「ないです……！チーズ大好きです……。あの……圭先輩もよかったら……」

「ありがとうな。じゃあ、一杯もらおうかな」

「で？泣いてた理由は聞いていいのか？」

「誰かに聞いてほしいと思っていたので……」

「今は、店も混んでないし、ゆっくり話聞いてやれるな」

高校の時もモテていたが、大人の色気も増して、さらにかっこよくなっていて、目の前にいるだけでドキドキしてしまう。

緊張と、泣きすぎで喉が渴いて、お酒が美味しく感じてしまい、ごくごく飲んでしまう。「さっき付き合ってる彼氏の家に行っただけですけど、浮気されて……もっと、遅く行く予定だったんですけど、仕事が早く終わったから合鍵で入っただけです……ぐすっ」

思い出してまた苦しくなる。

「そしたら、玄関に私のじゃない女の子の靴があつて……寝室から声がしたんで思わず扉に耳をつけてしまったんです……やらなければよかったってちよつと後悔してます……」
「うん」

涙をティッシュで拭いてくれる圭先輩。

「女の子の甘い声が聞こえてきて……彼が、私のこと淡白でつまらないって、言ってる……もう、苦しくて、ただ、ただ無心でここまで来たんです……」

「そうだったのか」

ぐすぐす泣く私が落ち着くまで待つてくれる圭先輩。

「圭先輩に相談することじゃないと思うんですけど……私、不感症かもしれないって……え、エッチでも気持ちいいって思えたことないんです……!!」

「へえ、不感症ねえ」

お酒を作りながら、話を聞いてくれる圭先輩。自分が不感症かもしれないと打ち明けるのはかなり勇気が必要だったけど、話さずにいられなかった。痛くはないけど、気持ち良くはない。本当に私にとってセックスはコミュニケーションのためのものにすぎなかった。グラスが空くと、圭先輩がおすすめのお酒を作ってくれる流れが出来ていて、どれも美味しくて進んでしまう。

「け、圭先輩は、こんなことで悩んだことないですよねっ……！だって、高校の時も女の子にモテモテだったし、エッチ上手だって噂もあったし……」

「そんな噂されてたのか？」

ははっと白い歯を見せて軽快に笑う圭先輩。笑うと少し幼くなつて、可愛い……。

「圭先輩、モテモテで、いろんな噂ありましたよっ……私の友達も、彼女になりたいって子いっぱいいたし……」

「そっか。凜は？」

急に振られてテンパる。

「えっ……！？わ、私はっ……別に……あの頃も、付き合ってる彼氏いましたし……」

圭先輩の彼女になりたい女の子はいっぱいいた。もちろん、私も彼氏ができる前は、圭

先輩のこと、かつこいいなと思っていたが、そんなこと本人に言えるはずもなく、あわわと焦りながら否定する。

「彼氏がいなかったら？」

さっきの笑顔が一瞬で獲物を捉えるかのような艶めかしい表情に変わって、飲み込まれそうになる。

「け、圭先輩は、かつこよすぎて、私なんて……って感じです……」

「凜のタイプに入ってるって思っている？」

こくこくと、無言で頷く。

「何その反応……かわい」

圭先輩、そんな顔するんだ……。お酒入ってるからかな……。勘違いしちゃうよ……。

「凜に提案があるんだけど」

「……？なんですか……？」

「俺と、気持ち良くなるためのエッチな練習してみない？」

「えっちな……練習……」

ごくくと唾を飲み込む音が圭先輩に聞こえてないか不安になる。えっちな練習って何……！？

「そう。凜は自分のこと不感症って思ってるんだろ？俺なら、凜を気持ち良くしてあげられるよ」

どう？と首を傾げられる。確かに、セックスで快感を得てみたい願望はある。

初めてそういうエッチなことをしてから今まで、相手に触れられて、声が我慢できなくなるほど気持ち良くなれたことがない。

セックスで満たされている友達を見ると羨ましく思っていた。

「で、でも……本当に不感症なんです……絶対……だって、好きな人としても気持ちいいって思えたこと、ないんです……」

「じゃあ、本当に不感症か確かめさせてくれよ。凜が嫌だ、気持ち良くないって言ったらすぐやめるから。それに、セックスで気持ち良くなってみたくない？」

「じゃっ……じゃあ、少しならっ……」

「少しならね。俺、もう上がりで、着替えてくるから5分後に店出てくれ」

「わかりました……！じゃあ、お会計……」

「今日は俺の奢り」

「そんな、ダメですっ……！」

コンビニで何か買ってこれと言に残し、颯爽と伝票をもって裏に行ってしまった圭先輩。

圭先輩に言われた通り、5分経ってからお店を出る。

すでにドアの外で待っていてくれたようで、私服姿の圭先輩が腕を組んで立っていた。

「行くか」

さらっと腰に手を回されて、腰がビクッと反応してしまう。緊張と酔いで足元がふわふわする。

「ど、どこに行きますかっ」

ホテルか、私の家からわからず、行き場所を聞いてみた。

「俺の家。ここから歩いて10分くらい。あそこのコンビニ寄るか」

「け、圭先輩の家っ……」

「嫌か？」

「い、いえっ……私なんかお家にお邪魔していいのかなって……!」

「いいよ、凜は特別」

ポンポンと頭を撫でられる。甘い、甘すぎる……。圭先輩は、誰に対してもこんな感じなのかな……。彼女とかもつと甘くて優しいのかな……。

コンビニに寄つて、お酒とお菓子、飲み物を買う。

「ああ、あと、これもな」

「サイズのコンドームを恥ずかしげもなくカゴに入れる圭先輩。一緒にお会計するのは恥ずかしいから外で待つてる、お金は後で請求してくださいと言ったのだが、ぎゅっと手を恋人繋ぎにされて、逃がしてもらえなかった。

しかも、恥ずかしくて俯いているうちに、圭先輩が会計を済ましてしまい、また奢ってもらうことに……。

「凜はどの辺に住んでるんだ？」

「私もこっちです……」

「じゃあ、どこかですれ違つてるかもな」

「すれ違つてるかもです……」

私の緊張をほぐすかのように、色々な話をしてくれる圭先輩。高校時代、みんながよく言っていたお店の話なんかもして、盛り上がっていると、家に着いたようで、手を引かれて玄関に入る。

「お、お邪魔しますっ……」

シトラスのいい匂いがして、一気に心拍数が上がる。これからあんなにかっこいい人とエッチなことするんだ……。圭先輩、私の体に興奮してくれるのかな……。

色々考えて、急に不安な気持ちになる。

「凜？こっちおいで」

呼ばれて、向かうと広いリビングでお茶を用意してくれている圭先輩。ここでエッチするのかな、もうセックスのことで頭はいっぱいになっていた。

「体ガチガチだな。そんなすぐ手を出したりしないよ」

ポンと、大きな手を頭に乗せられる。入れてもらったお茶を飲んで、一息つく。私が、お茶を飲んで一息ついている間に、タオルや洋服を準備してきた圭先輩。

「凜、おいで」

呼ばれて、圭先輩の後をついていくと、綺麗な浴室に連れて来られる。

エッチする前に体を綺麗にしたいと思っていたので、案内してもらえて、少しホッとしていたのだが、圭先輩が目の前で服を脱ぎ始めて戸惑う。

「えっ……」

「凜も脱いで」

「一緒、に入るんですか……………」

そんな難易度高いことできない……！とあわあわしていると、バンザイしてと言われてしまい、いとも簡単に下着姿にされる。

「肌白くて綺麗だな」

ぎゅっと抱きしめられて、ぱちっとブラジャーのホックを外されてしまう。

「あっ……………」

恥ずかしくて、腕で胸を隠している間に、パンツもするりと脱がされる。

「そんな隠しても、すぐ見られることになるけどな」

乳首、おまんこをどうにか隠して、浴室に入る。2人で入っても余裕なくらい広い浴室。大きな鏡に、圭先輩の手を腰に回された自分の姿が写ってさらに恥ずかしい気持ちになる。温まったシャワーをかけてもらって、体の緊張が少しほぐれる。

「熱くないか？」

「気持ちいいです……」

手慣れた手つきで髪を洗ってくれる圭先輩。力加減が絶妙で思わずため息が出てしまう。「圭先輩、髪の毛洗うのも上手なんですな」

「そうか？ 気に入ってくれたらなら嬉しいよ」

丁寧にリンスまでしてくれて、持っているゴムで、圭さんに、後ろを向いてもらって髪

をお団子にまとめる。

泡立てたボディソープを体に塗りつけられる。

「んっ……………」

「凜の肌はすべすべだな」

首、背中を洗われ、ぎゅっと硬直させている腕を洗われる。

大きな手で撫でられる感覚は、包まれているようで快楽より安心感に近い。

「胸も綺麗にしような」

ふわふわの泡が胸につけられて、下からタブタブと揺らされる。

「んっ……………」

「腕をどかしてご覧？ここも綺麗にしないとイケないだろう？それとも、今の状態のまま舐められたいか？」

それは嫌だと、ゆっくり腕を下す。

「凜は、すぐ言うことを聞けていい子だな」

乳首周りを入念に擦られる。今までと違う感覚になるのは、圭先輩に触れられているからだろうか。

乳首の先端がむずむずと疼く感覚に襲われる。

「鏡に写ってる凜の乳首、見てごらん？触ってないのに、ピンと勃ってて可愛いな？」
グッと顎を鏡の方に向かされて強制的に自分の乳首を見させられる。

「……やつぁ……………」

乳首もそうだが、頬を赤めとろんとした欲情した表情をする自分を見るのは初めてで、目を背けたくなる。

このまま乳首をいじられるのかと思ったが、乳首周りをすりすりとは撫でられるだけで、もどかしさだけが募っていく。

「凜、こっち向いて」

圭先輩に言われて、そのまま上を向くと、ちゅつと何度か軽いキスを落とされる。

「んっ…………ふう……………」

……ちゅっ、ちゅぐ…………クチュ……………

舌を絡める深いキスに変わっていく。柔らかくて、気持ち良くて、頭がぼーつとする。キスされながら、すりすりと乳輪を撫でられ、時々指が乳首に当たる。

「んっ…………ち、くびっ……………」

「ん？乳首がどうした？」

ピンピンと先端を軽く弾かれる。

「ふああづ……………気持ち……………いいつ……………乳首、気持ちいいですづ……………」

嘘っ……………乳首ってこんなに気持ちいいのっ……………頭、真っ白になるっ……………

「凜は、乳首どうされるのが気持ちいいんだ？」

指でピンピン弾かれ、さらにぎゅっと指で潰される。

「んああ……………！だめっ……………それ、だめっ……………♡♡♡」

何か込み上げてきそうになる。

「何がダメなんだ？乳首を潰されてこんな甘い顔になっているのに」

そう言われ、思わず鏡を見る。そこには、乳首を潰されながら、気持ち良くてたまらないという顔をしている自分が写っている。

「ピンピンもっ……………潰されるのもっ……………全部気持ち良くてダメですっ……………乳首っ、気持ちいいと思ったことないのに……………」

「凜は、緊張すると体が硬くなりやすいから、時間をかけて解してやらないといけないみたいだな。体に触れられることに慣れて、快感を拾えるようになったんだろう」
ピンっ、ピンっ乳首を弾かれる。

「んあぁっ……………」

「今までの男は、こうして時間をかけて触ってくれなかっただろう？」

「んっ……………いつもっ……………すぐ、挿入で、こんな乳首触られたことないいい……………」
こくこくと頷きながら答える。

「もう、自分でもわかつてるだろうが、凜は不感症じゃないよ」

「不感症、じゃない……………？セックスでも気持ち良くなれますか……………？」

「それは、これから試してみないと」

圭先輩の手がおまんこに移動していく。

「あっ……………」

くちゅくちゅとおまんこが濡れてる音が浴室に響く。

「乳首とキスでこんな濡れ濡れになったのか？」

蜜穴の愛液をクリトリスに塗りつけられる。

「ふぁっ……………んん……………んあぁっ……………」

ヌルヌルすごいっ……………クリトリスに指が当たるの、気持ちいいっ……………

胸の下に入れている腕をぎゅっと握って、ガクガク震える足を奮い立たせる。
クリトリスが愛液で包まれると、根本から先端にかけて優しく撫でられる。

「んあっ……………♡クリっ気持ちいい……………!!」

「凜のクリトリスは、桜色で小さいな」

圭先輩の視線は、鏡に向かっている。鏡越しに自分の秘部を見つめられて、恥ずかしさで隠したくなったが、手を持って行こうとした瞬間、ピンっピンっと指で強く弾かれ、圭先輩の腕を掴むので精一杯だった。

「らっめっ……………!!強いっいい……………クリっ、そんなにピンピンしないれっ……………!!」

「だめ?こんなに愛液をダラダラ垂らしているのか?」

「んう……………だめっ……………!!クリ、きちゃうから……………!!なんかきちゃうからだめっ……………」

ピンピン指で弾かれ、左右に揺すられ、圭先輩の空いた手で乳首も潰される。感じたことのない快楽が一気に襲ってきて、なにかが弾けそうだった。

頭が真っ白になりかけている中でも、これが絶頂なのかと体に力を入れて、受け入れようとする。

「……………?」

絶頂のために呼吸も整えたのに、期待していた快楽は襲ってこなかった。ただ、疼きだけが残る。

「だめなんだろう？ クリはこんなにぶっくり腫れて絶頂したそうに見えるけど、だめなら仕方ないな。凜に、クリイキの気持ちよさを教えてあげようと思ったが」

「あ……………だ、だめは違ってっ……………」

「ん？」

圭先輩の顔を直接見て、訴える。

「だめじゃないですっ……………もつと気持ち良くなりたいですっ……………でも、こんな気持ちいいの初めてで、怖くて……………だめって勝手に口からでちゃうんですう……………」

「そうか、気持ち良すぎてだめって言葉が出てたんだな。じゃあ、凜のだめはやめてほしいじゃないってことでもいいか？」

こくこくと頷く。

「だめって言われると否定されているみたいで悲しいからできるだけ気持ちいいって言葉に変えられるように頑張ろうな」

「……………はいっ……………気持ちいい……………っ」

解放できなくて疼いているクリトリスがまた圭先輩の手で快樂へ導かれ始める。

ぶっくりと腫れたクリトリスを指で挟んで上下にシコシコと動かされるのがたまらない。

「んあああ……………♡それっ……………気持ちいいっ……………らっ……………んん」

「今ダメって言おうとしたの自分でやめられたな」

いい子、いい子とクリトリスをトントン、褒めるように叩かれる。

「きっちゃうううう……♡！！！！気持ちいいのづ……きちゃう……♡」

「イク？」

「……………いくつ……………いくつ……………」

頭が真っ白になり、クリトリスから頭まで快楽が駆け巡り、焦点が合わなくなる。
ビクビクとクリトリスが脈を打っているかのような感覚に包まれる。

「……………はあ……………はあ……………♡」

「幸せそうな顔してて、可愛い。初めてのクリイキだった？」

「……………気持ち良くて……頭真っ白になりました……………」

圭先輩は、私を抱きしめて、股の間に来るようにマットに腰を落とした。

座っても、全身が写る大きな鏡。

はあはあと息を整えることに集中させ、きゅつと足を閉じておまんこが鏡に写らないようにする。

「乳首は綺麗にできたから、次はこっち、綺麗にしような」
大きな手で太ももをパカッと開かされる。

「あつ……………やっあ……………だめっ、見ちゃ……………」

「凜、これから綺麗にするのに隠しちゃだめだろう？それとも、舐めて綺麗にしてほしい？」
綺麗にしてない状態の乳首よりおまんこのほうが舐められたくない……………！汚いもんっ……………！

「さっきごしごししたところは綺麗になってるだろうが、皮の中とか、お尻の穴は綺麗にできないからな。舐めて綺麗にされなくなったら手どかしな？」

「うう……………」

恥ずかしさで、少し涙目になりながら、手をゆっくり元に戻していく。

見られちゃうっ……………おまんこも、お尻の穴も全部見られちゃうっ……………

恥ずかしいのに、圭先輩に見られていることに興奮してしまって、蜜穴をクパクパと開閉させて愛液を垂らしてしまう。

「おまんこは優しい石鹸で洗わないとな」

圭先輩の手には、トロツとした液体が乗っている。クチュクチュと泡立てた石鹸をおまんこに垂らされる。

「んっ……………」

鏡に、とろとろの透明な石鹸に包まれたクリトリスが写っている。さっきコリコリと刺

激されたせいとか、ピンと勃って、主張しているように見える。

「足閉じないように自分でここ持ってたな」

手を自分の太ももに誘導される。寄りかかっている圭先輩の体は大きくて包まれているみたいでドキドキする。

「凜は、自分のおまんこ、こうやってじっくりみたことあるか？」

くぱあと大陰唇を圭先輩の太くて長い指で強制的に開かされる。

「そんなっ……なっ……ないですっ……!!!!」

鏡に映る自分のおまんこは想像していたより、ピンク色で愛液をたくさん溢して、ひくひくしていた。

「じゃあ、いい機会かな。自分のおまんこがどうやって綺麗にされるか見てな」

圭先輩の指が大陰唇と小陰唇の間の粘膜をヌコヌコと何度も指を行き来させる。既に味わったことのない快楽である。

「ふあっ………んんっ………♡♡♡」

クリトリスに軽く指が当たると腰がカクッと震えてしまう。

「クリも皮剥いて中まで綺麗にしような」

さっき絶頂して、敏感になっているクリトリスは今、1番触れられてはいけない場所な

気がして、腰を後ろに引こうとするが、圭先輩がいるのでできない。

「クリっ……さっき、いっぱいゴシゴシして、敏感だからっ、優しくしてくださいっ……うう……」

「んー、出来るだけ優しく触るけど、綺麗にしないといけないから、頑張って我慢な。我慢できなそうだったら、好きなだけイっていいから……ね？」

下からピンピンと弾かれ、もう片方の親指で、ぐっと皮を剥かれる。

「おづ……んあつつつつ……あううう……も、無理かもお」

「皮剥いたらピコってしたな」

さっきよりも敏感そうな皮の中が強制的に外に出されている。

これ、ゴシゴシされたらっ……死んじやうづ気持ち良すぎて死んじやうづ……さっき初めてクリいきしたばっかなのにい

剥かれたクリトリスを指でコリコリと左右に揺すられ、大きな声が出てしまう。

「あああああ……♡らめづ……だつつつめえ……♡それっ、気持ちいいの強いづ……気持ちいいのいっばいすぎてっ、頭おかしくなっちゃうっ……！！」

さっき塗られた石鹸の滑り具合がさらに頭をおかしくさせる。

「気持ちいいの強すぎておかしくなりそうか。でも、クリはこんなにぷっくりしてて気持ち

よさそうだな？」

見たこともないくらいぷっくりと腫れたクリトリスをコリコリといじられているところから目が離せない。

「あんづ………あぁ………もつつ、無理っ………くりっ無理っ………♡♡♡我慢、無理いい………いっちゃう………気持ちいいのきちゃうう………♡♡♡」

左右にブルブルとクリトリスを震えさせられて絶頂する。

「綺麗になったな。1回泡流すな」

温かいお湯が、お腹にかけられて、流れていくお湯でクリの泡も落ちていく。

「あれ？凜、お湯で流したのに、ここ濡れ濡れだな」

「ふえっ………！？」

つぼつぼと密穴に軽く指を出し入れられ、過去のセックスを思い出し、体が硬直する。
「凜………？あー、指入れられるの怖い………？」

「こ、怖いわけじゃないんですけど………気持ちいいと思えたことがなくてっ………思い出してしまっ………」

「俺の事信じて体預けて？さつきも気持ち良くなれただろ？凜が気持ちよくなれるように、指入れてもなれるまでクリ触ろうな」

ポンポンと頭を撫でられて、安心し、体の力が抜ける。

つぽつぽと軽く指を出し入れされると同時にクリトリスもピンピンと弾かれる。クリの快楽に意識が入って、密穴に指をいられている違和感がなくなっていく。

「んっ…………クリっ…………気持ちいい……………」

「クリ、気持ちいいな」

ヌコヌコと、指がどんどん奥に挿入されていくが、クリへの快楽が勝って、体はリラックスしたままだ。

クリへの刺激、舌を絡めるキスが繰り返されて、とうとう、圭先輩の指を奥まで咥え込んだ。

「んっ…………ふあああ…………中っ、違うっ…………そこっ…………お腹、きゅんってなるっ…………♡」

お腹側を指の腹でトントンと軽く刺激され、今までと違う感覚に襲われる。

中っ、気持ちいいかもっ……………気持ちいいのがどんどん蓄積されてく感じっ……………これ…………イったらもう、戻れなくなっちゃいそうっ……………

「指、馴染んできたみたいだな。いっぱい俺の指しめてきて、凜のおまんこは可愛いな」
「あうう……………恥ずかしい……………」

クリも中もトントンと軽く叩か続けるだけで、もどかしい快楽が続く。

「クリっ……イきたいっすっ……」

腰をかくかく動かして、クリトリスへの刺激が強くなるように誘導させる。

「こーら、中慣らすためにクリ弄ってただけだろう？中できけるようになるまでクリイキは禁止な」

「そっ、そんなあ、っ………イきたいっ………！！！！」

ピンピンと指で弾いてくれても、絶頂しようと体に無意識に力が入った瞬間に、パツと離されてしまう。

その度に残念な声が出てしまう。

「ああ………もうちょつとで、いけったのにいい………！圭先輩っ………お願いいいづ………クリ気持ち良くしてえ………」

圭先輩の首元の後頭部をつけて、上を向き、おねだりするが、だめだときっぱり言われてしまう。

蜜穴の指も2本に増やされて、快楽が増していくが、絶頂できた経験がないので、上手なイキ方がわからない。

やっとクリでイけた。気持ちいい……。この余韻にずっと浸っていたと考えていたら、蜜穴の指がぬぽぬぽと動かされ始めたのに気がつく。

「まってえ……いまつ、クリでイったばつかあああ………」

「クリは触らないよ、中でイクんだろ？」

じゅぽじゅぽっと何度も出し入れを繰り返され、敏感な部分をトントンとなんども容赦なく叩かれ、蓄積された快楽が弾けそうになってくる。

「あああ……！！うう………っ♡そこっだめなのう………気持ちいいの強いっ………おっきいのくる………♡」

そういうと、空いてる方の手で、勃っている乳首にもピンピンと刺激を与えてくる。

「あ………うう………むっりっ………」

ぶわっと鳥肌が立ち、今までに感じたことのない深く長い快楽の波が訪れる。

きゅうきゅうと勝手に膣が開閉し、愛液は溢れてアナルまで垂れてしまう。

「中でもイけたな」

ぽんぽんと頭を撫でて褒められる。こんなに誰かから褒められたのは久しぶりな気がした。

ただ、気持ち良くなったただけなのに、圭先輩は、いい子いい子と褒めてくれる。

「泡流そうな」

残りの泡を流して、隅々までバスタオルで拭いてくれる。まるでお姫様になった気分だ。髪のもも、丁寧乾かしてもらって、寝落ちしてしまいそうなくらい心地よかった。

何度も絶頂したことで、ボーっとしている私をベッドにゆっくり下ろしてくれる圭先輩。コンビニでサイズを確認してるので、わかっているつもりだったが、目の前に出されると、想像以上に大きくて、太くて、少し腰が引けてしまった。

私も圭先輩を気持ち良くしなきゃと、意気込んでいたが、

「今日は、凜の不感症を確かめるためのエッチだろう？凜のご奉仕は今度な」

今度という言葉に、また会ってくれるのだと嬉しくなる。

サイドテーブルに置いてあったコンドームをつけた瞬間、圭先輩の目が変わった気がしたが、気のせいだろう……。

「Z」字に開かされた足は震えているのに、憧れのひととセックスしてしまうことに興奮し、気持ちは期待で満ちていた。

その太く大きな肉棒を受け入れられるか不安だったが、中イキを思い出し、圭先輩なら気持ち良くしてくれると思うと思考を切り替える。

「ゆつくり挿れるな？痛かったら教えて」